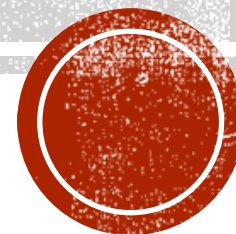


<https://www.youtube.com/watch?v=cA5YSIm4o0Y>

木簡の中の王朝交代

YouTube講演は、表題をクリックしてご覧になれます



古田史学の会・関西例会

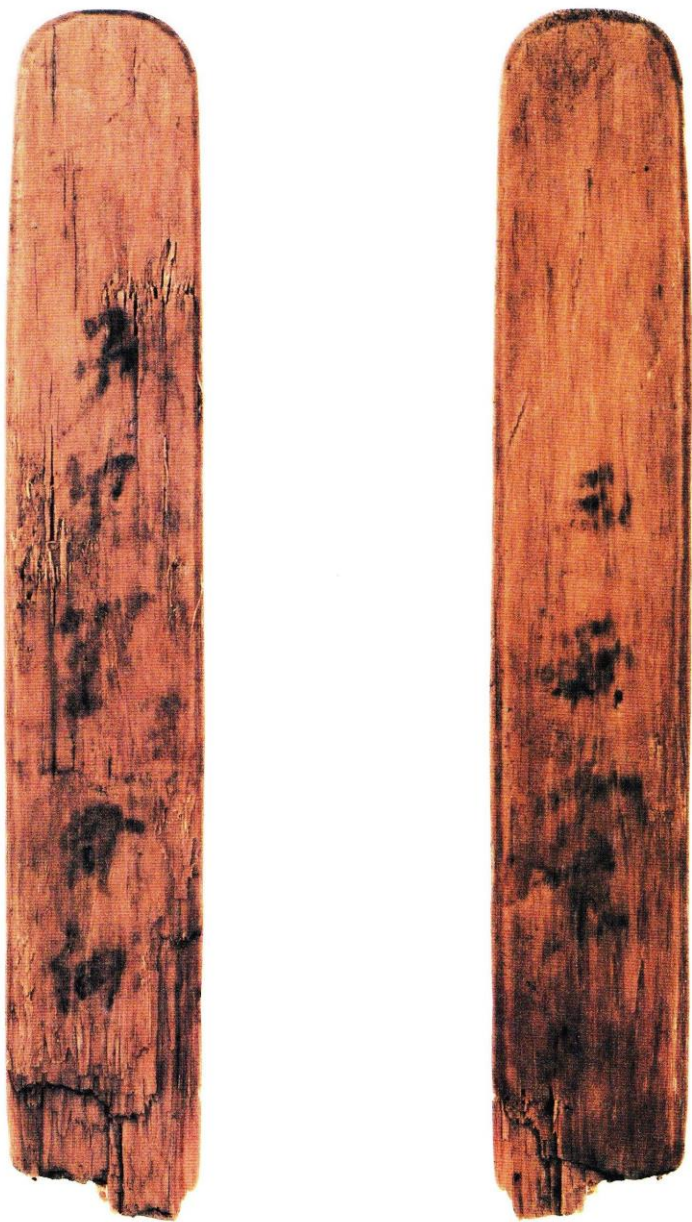
令和5年(2023)8月19日(土)

古賀達也(古田史学の会)

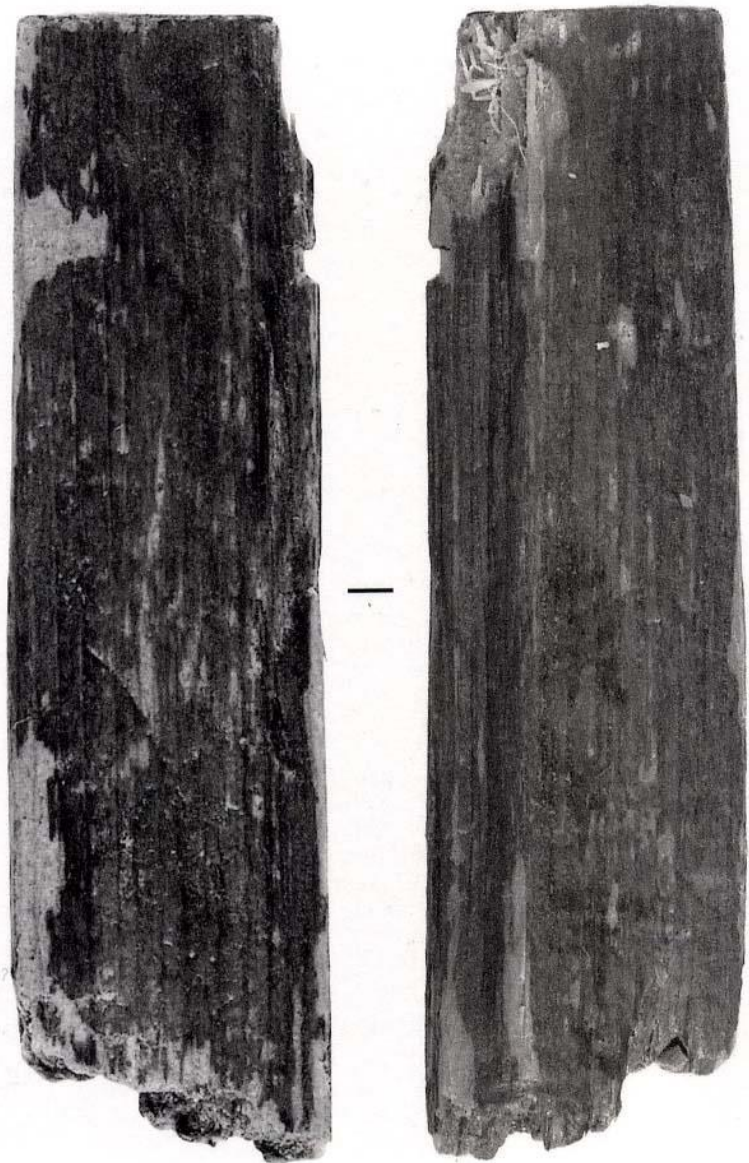
上部空白型《九州年号》干支木簡



・子卯丑□伺
・○元壬子年□



芦屋市三条九ノ坪出土「(白雉)元壬子年(652)」木簡



飛鳥池出土「庚午年(670)」木簡



前期難波宮出土「戊申年(648)」木簡(複製)

上部空白型干支木簡



(前略) 墨書は表裏両面に確認でき、他の木簡とは異なり、異筆による書き込みがある。**表面側の墨書は上端から約7cmの位置から「戊申年」ではじまる文字が書かれており、**以下、現存部分のみで3文字が後続していることがわかる。

また、欠損した左側面には「**戊申年**□□□」文字に対応するように墨痕や文字の一部が残っており、本来は同じ字配りで最低でも2行以上の墨書があったことになる。「**戊申年**」上方の異筆3文字を除いた場合、**書き出し位置が低いようにみえるが、**これについては栄原永遠男氏が指摘するように、大型の木簡におおぶりの文字で書かれていたと推察される点を勘案するならば、さほど不自然であるとはいえない。(後略)

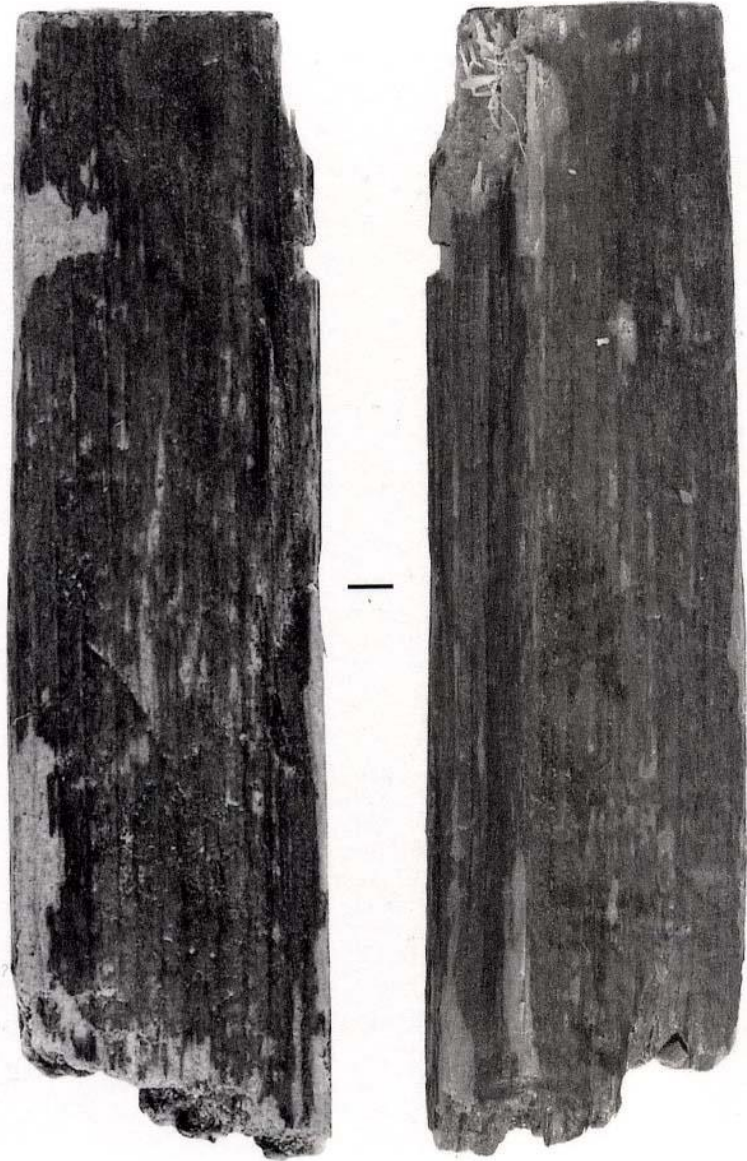


飛鳥池遺跡北地区出土

「合合」○**庚午年**三→（「合合」は削り残り）・○□\○□

上端・左右両辺削り、下端折れ。表面の左側は剥離する。「庚午年」は天智九年(六七〇)。干支年から書き出す木簡は七世紀では一般的であるが、**本例は書き出し位置がかなり下方である。**共伴する木簡の年代観からみてもやや古い年代を示している。庚午年籍の作成は同年二月であり(『日本書紀』天智九年二月条)、関連があるかもしれない。

(奈良文化財研究所「木簡庫」)



飛鳥池出土「庚午年(670)」木簡



行政単位「評」から「郡」へ（七〇一年）

越中国からのサバの荷札

（三五七号木簡）

〔表〕越中国羽咋郡中男作物鯖壺伯隻

〔裏〕

天平十八年

〔廣椅〕
〔大庭〕

長さ二九〇mm・幅三七mm・厚さ六mm ○三一型式



藤原宮跡出土木簡（複製）

「上埭国阿波評松里」の表記が見られる。



福岡市元岡桑原遺跡出土木簡



「壬辰年(692)韓国鉄」木簡



「大寶元年辛丑(701)」木簡

・「六人部」(持力)

・「大寶元年辛丑十二月廿二日
官川内 鮑廿四連代税
黒毛馬胸」(白カ)



・「大寶元年辛丑十二月廿二日
官川内 鮑廿四連代税
黒毛馬胸」(白カ)

・「六人部」(持力)



・「延書」(用仍) (真カ) 中カ
延暦四年六月廿四日

・「延書」(用仍) (真カ) 中カ



26
「延書」(用仍) (真カ) 中カ
延暦四年十月十四日真成

【大和朝廷（日本国）の紀年表記】

「凡そ公文に年記すべくは、**皆年号**を用いよ。」『養老律令』儀制令

【九州年号金石文の紀年表記】

※**年号十干支**

○伊予国湯岡碑文

「**法興六年**十月歲在**丙辰**」（五九六年）

○法隆寺釈迦三尊像光背銘

「**法興元卅一年**歲次**辛巳**十二月」（六二二年）

○白鳳壬申骨藏器 『筑前国統風土記附録』

「**白鳳壬申**」（六七二年）

○鬼室集斯墓碑 滋賀県日野町鬼室集斯神社

「**朱鳥二年**戊子十一月八日」（六八八年）

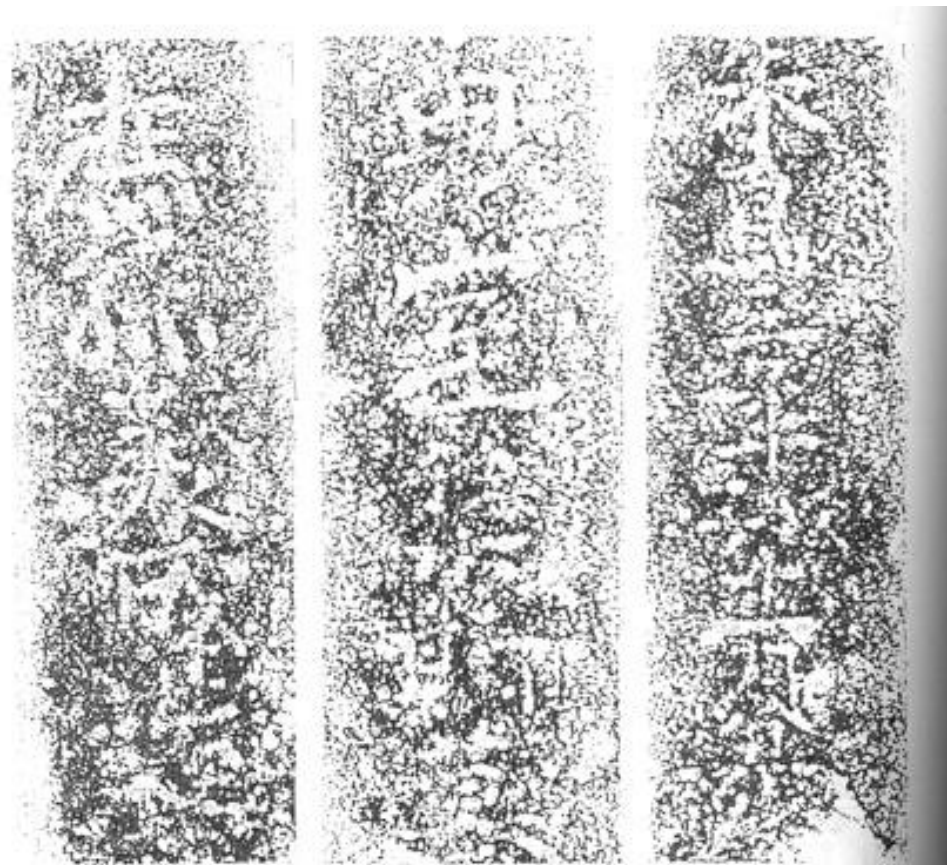
○大化五子年土器 茨城県岩井市出土

「**大化五子年**二月十日」（六九九年）

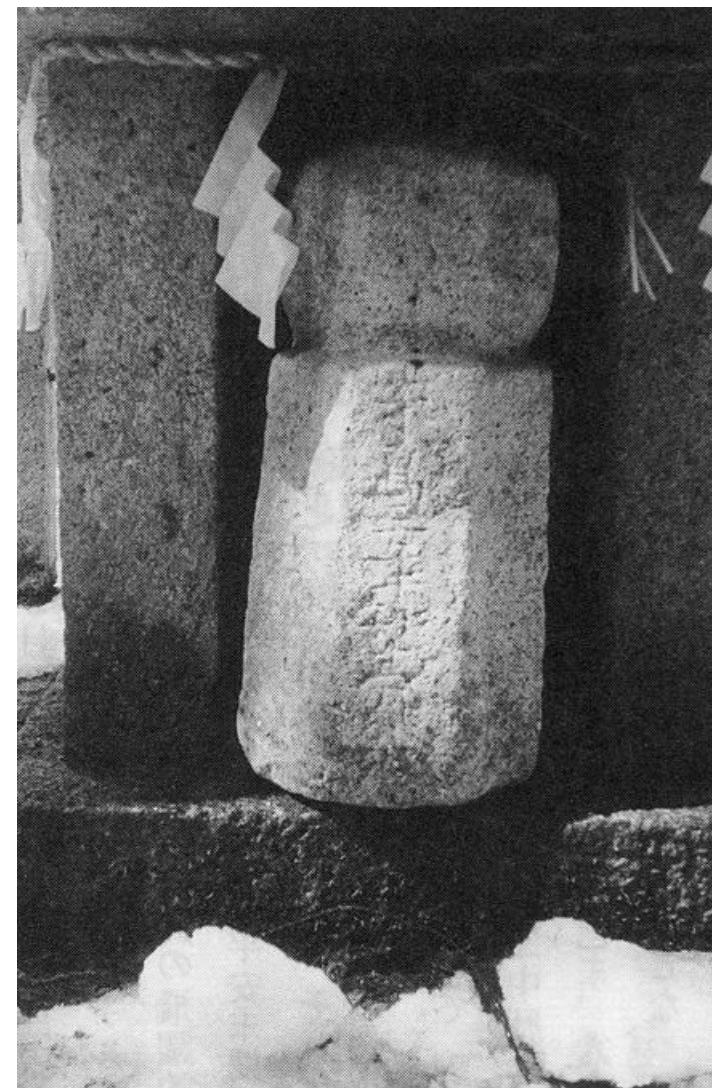




大化五子年土器（筆者撮影）



鬼室集墓碑拓本（胡口康夫『近江朝と渡来人』より転載）



鬼室集墓碑（筆者撮影）



法隆寺釈迦三尊像光背銘



法興元卅一年歲次辛巳十二月、鬼
前太后崩。明年正月廿二日、上宮法
皇枕病弗愈。干食王后仍以勞疾、並
著於床。時王后王子等、及與諸臣、深
懷愁毒、共相發願。仰依三寶、當造釋
像、尺寸王身。蒙此願力、轉病延壽、安
住世間。若是定業、以背世者、往登淨
土、早昇妙果。二月廿一日癸酉、王后
即世。翌日法皇登遐。癸未年三月中、
如願敬造釋迦尊像并侍及莊嚴
具竟。乘斯微福、信道知識、現在安隱、
出生入死、隨奉三主、紹隆三寶、遂共
彼岸、普遍六道、法界含識、得脫苦緣、
同趣菩提。使司馬鞍首止利佛師造。



伊予湯岡碑

法興六年（五九六年）



法興六年十月、歲在丙辰、我法王大王与惠慈法師及葛城臣、逍遙夷与村、正觀神井、歎世妙驗、欲叙意、聊作碑文一首。

惟夫、日月照於上而不私。神井出於下無不給。万機所以妙応、百姓所以潜扇。若乃照給無偏私、何異干寿国。随華台而開合、沐神井而瘳疹。詎舛于落花池而化羽。窺望山岳之巖嶸、反冀平子之能往。椿樹相廕而穹窿、実想五百之張蓋。臨朝啼鳥而戲哢、何曉乱音之聒耳。丹花卷葉而映照、玉菓弥葩以垂井。經過其下、可以優遊、豈悟洪灌霄庭意歟。

才拙、実慚七步。後之君子、幸無蚩咲也。

『釈日本紀』所引または『万葉集註釈』所引『伊予国風土記』逸文より

惟夫日月照於上而不私神井出於下無不給
所以機妙應百姓所以潜扇若乃照給無偏私
何異干壽国随華台而開合沐神井而瘳疹
詎舛于落花池而化羽窺望山岳之巖嶸反冀平子之能往
椿樹相廕而穹窿実想五百之張蓋臨朝啼鳥而戲哢
何曉乱音之聒耳丹花卷葉而映照玉菓弥葩以垂井
經過其下可以優遊豈悟洪灌霄庭意歟
才拙實慚七步後之君子幸無蚩咲也

レプリカ



野中寺弥勒菩薩像銘 丙寅年(六六六年)

丙寅年四月大旧八日癸卯開記栢寺智
識之等詣中宮天皇大御身勞坐之時請
願之奉弥勒御像也友等人数一百十八
是依六道四生人等此教可相之也



小野毛人墓誌 丁丑年(六七七年)

表面

飛鳥淨御原宮治天下天皇御朝任太政官
兼刑部大卿位大錦上

裏面

小野毛人朝臣之墓

宮造歲次丁丑年十二月上旬即葬



船王後墓誌

戊辰年（六六八年）



惟船氏故王後首者是船氏中祖王智
仁首兒那沛故首之子也生於乎娑陀
宮治天下天皇之世奉仕於等由羅宮
治天下天皇之朝至於阿須迦宮治天
下天皇之朝天皇照見知其才異仕有
功勲勅賜官位大仁品為第三殯亡於
阿須迦天皇之末歲次**辛丑**十二月三
日庚寅故**戊辰**年十二月殯葬於松岳
山上共婦安理故能刀自同墓其大兄
刀羅古首之墓並作墓也即為安保萬
代之靈基牢固永劫之寶地也

惟船氏故王後首者是船氏中祖王智仁首兒那沛故
首之子也生於乎娑陀宮治天下天皇之世奉仕於等由
羅宮治天下天皇之朝至於阿須迦宮治天下天皇之
朝天皇照見知其才異仕有功勲勅賜官位大仁品為第
三殯亡於阿須迦天皇之末歲次**辛丑**十二月三日庚寅故
戊辰年十二月殯葬於松岳山上共婦安理故能刀自
同墓其大兄刀羅古首之墓並作墓也即為安保萬
代之靈基牢固永劫之寶地也

采女氏瑩域碑

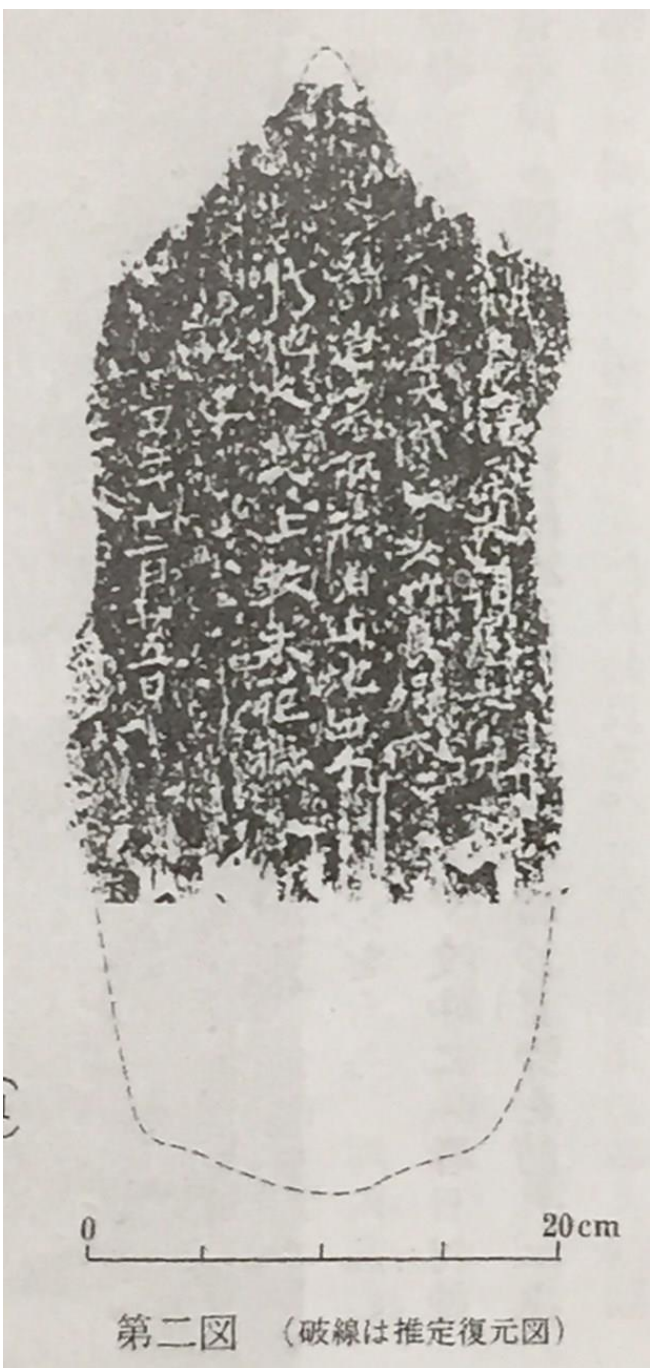
己丑年（六八九年）

飛鳥淨原大朝廷大弁
官直大貳采女竹良卿所
請造墓所形浦山地四十
代他人莫上毀木犯穢
傍地也

己丑年十二月廿五日

采女氏瑩域碑

小杉文庫藏拓本真拓



『日本書紀』に見える「采女竹良」

「采女氏瑩域碑」に記された、「飛鳥浄原大朝庭の大弁官」で「直大弐」の冠位を持つ「采女竹良卿」の名前は、『日本書紀』にも「采女竹羅」「采女筑羅」として見える。

○(秋七月)辛未(四日)に、小錦下采女臣竹羅をもて大使とし、當摩公楯をもて小使として、新羅国に遣わす。〈天武十年(681年)〉

○(九月)次に直大肆采女朝臣筑羅、内命婦の事を誅(しのびごとたてまつ)る。〈朱鳥元年(686年)〉



那須国造碑

永昌元年己丑（六八九年）



永昌元年己丑四月飛鳥淨御原大宮那須国造
追大壹那須直韋提評督被賜歲次康子年正月
二壬子日辰節殄故意斯麻呂等立碑銘偲云尔
仰惟殞公廣氏尊胤国家棟梁一世之中重被貳
照一命之期連見再甦碎骨挑髓豈報前恩是以
曾子之家无有嬌子仲尼之門无有罵者行孝之
子不改其語銘夏堯心澄神照乾六月童子意香
助坤作徒之大合言喻字故無翼長飛无根更固

